

震災後の子どもたち(12)

ママと暮らせばいいのだ

鹿島 和夫



わたしのクラスには、まだ六歳とか七歳だとい
うのに、さまざまな人生の辛苦を味わっている子
どもが少なからずいます。

そんななかで、最近、増えてきたのは、両親が
離婚したために、父子家庭、または、母子家庭と
なって育てられている子どもたちです。

以前には、両親が離婚をして、お母さんに育て

られているとか、お父さんに育てられているとか
という子どもは、教室にいても、なぜか、言動に
暗さが見られて、人見知りをしたり、ひとりぼっ
ちで過ごしたり、おしゃべりもしないという様子
がよく見られるものでした。

でも、最近の子どもの様子を見ると、ほとん
どの子どもたちは、そんな暗さや影は、微塵も見

せなくて、みんなといっしょに遊んでいても、異質なものはまったく感じられない子どもが多くなったように思います。少なくとも、どの子どもたちも経済的には恵まれていて、風采に貧乏だったらしい感じがなくなっているからかもしれません。

二年生の浅井優貴恵ちゃんは、そんな子どもの一人でした。最初の頃、わたしは、まったく父子家庭で育てられている子どもだとは思ってもみませんでした。

いつもにこにことしていて、だれとでも仲良く付き合え、だれからも好かれる。仕事もてきぱきとやりこなし、学力も良好だからです。

ところが、あるとき、優貴恵ちゃんは、つぎのような作品を書いてきたのです。

うまれたとき

2年 あさいゆきえ
わたしがうまれたとき

ベットのうえでねていました

パパとママのひざにだっこをしてもらって

しゃしんをとってもらいました

わたしがふとんの上にねころがって

わらっているところもとってもらいました

おめんをかぶっているところも

とってもらいました

いっぱいわらっているところを

とってもらいました

パパもママもしあわせになるとおもって

いつもわらっていました

だけどパパとママはりんしました

最後の一行で、私は絶句してしまったのです。

さりげなく書かれているけれども、わたしにとっ

ては、思ってもみなかった事実だったからです。

そして、急に、優貴恵ちゃんのお母さんは、どう

しているのだろうかかと興味を抱くようになったの

です。

個人懇談会の時、お父さんに単刀直入に尋ねてみたのです。

「お父さんは、お母さんと離婚されたのですね」

「ええ、そうですよ」

「戸籍も抜かれていますか」

「きちんと抜いています」

「どうして、別れたのですか？」

おとうさんは、五分刈りの頭に手をやって、遅しい体をすくめながら、恥ずかしげに伝えてくれました。

「いやあ、愛情がなくなったのです」

「えっ、それだけが理由ですか」

「そうです。それで、向こうが出ていったのです」

「子どもが可哀そうだとか、子どものために辛抱するとか、思わなかったのですか？」

わたしは、つまらないことを聞いてしまっていました。まるで、芸能レポーターのようです。

「いいえ、なにも思わなかったです。しょうがないことやと思いましたから」

こんな話を聞くと、わたしは、余計なことを考えてしまうのです。この夫婦の愛を蘇らせることができないものだろうか。

というのは、優貴恵ちゃんが、ママといっしょに住みたいということを以前に書いていたことを覚えていたのですから。

あるとき、優貴恵ちゃんは、みんなでお母さんに会いにいったのです。そのときのことを、「あのねちよう」に書いてきてくれました。

ママのいえ

2年 あさいゆきえ

きょうのばん3人

ママのいえにいつとまりました

おふろにもはいました

ママのへやはひとつしかないけど

へやのかぎはカードになっています

ねるときはゆきえとひでみが

ママのベットにねて

ママとパパはカーペットで

ふとんをひいてねました

わたしは、こんな様子を読むと、仲むつまじい夫婦の生活を想像してしまいます。

別れた妻の部屋へ、親子で遊びにいらっている。そして、同じ部屋で夜を過ごしている。こんなことができるのは、やはり、愛があるからではないでしょうか。

わたしは、また、余計な事を想像し、そして、けしかけてしまうのです。

「お父さん、復縁されたらどうですか。優貴恵ちゃんが、一番、喜ぶことだと思いますがね」

お父さんは、苦笑いしながら、「いやいや、そんなこと考えたことないです」と答えたのです。

最近の若い人たちの思想や生き方について不可解なことがあります。このお父さんの行動もそのひとつとなりましょう。

本当に、夫婦の絆って不可思議なものなんだ。わたしは、優貴恵ちゃんの明るさと、お父さんのてらいのない態度を見ると、つくづくと感じるのです。

一九九五年一月十七日の早朝、阪神地区に大地震が起こりました。浅井一家も、大きな被害を受けたことはいままでもありません。

地震の時、鉄筋住宅の七階は、倒れなかったのですが、部屋の中は、ぐしゃぐしゃになってしまいました。サイドボードやテレビ、それに食器棚、本箱などが、体の上に被ってしまいました。幸いにして怪我はなかったのです。親子三人は、雑具の山をそろりそろりと外へ脱出したのです。

最初、小学校の教室へ避難したのです。

しばらく、そこで、お父さんと妹と三人で過ごしていました。救援物資を貰って食事をして、仮設に設けられたシャワーで体を洗い、仮設トイレで用を達するという生活が続きました。

そんな不自由な生活を聞きつけたお母さんは、三人を自分の狭い家に呼んだのでした。

お母さんは、大阪城近くのマンションに住んでいましたから、震災の被害はありません。部屋は、一つしかない狭い場所でしたけれども、再び、親子四人での生活が始まったのです。

久し振りに味わうお母さんの手料理は、優貴恵ちゃんを狂喜させました。おいしいし、お父さんが作ってくれる料理とは、ひと味違ったものを出してくれるのですから。

それに、カラオケに行ったり、公園へ遊びに行ったり、それにスキーにも行ったりしました。

このようなお母さんと暮らす生活は、優貴恵ちゃんにとって、とっても幸せなことでした。こ

のまま、お母さんと一緒に暮らせるといいのにとずっと思っていました。

わたしに伝えてくれた「あのねちゃん」には、お母さんの楽しい語らいや思い出がいっぱい書かれています。

わたし自身も、このまま、お母さんと暮らせるようになったらいいのにとさえ思っていました。

震災で不幸になったけど、そのことで、お母さんとお父さんの愛が復元する。これは、不幸中の幸いではないか。

ところが、お父さんは、もとの家で住めるようになったから、家に帰るといいでしたのです。

そして、一か月程生活をして、三人は、家に帰ってきたのです。

おわかれ

2年 あさいゆきこ

ママのいえからかえってきました

ママはもっとおりとといったけど

パパはかえるといってききません

かえってからごはんをたべました

そしてテレビをみていると

さびしくなつてなみだがでてきました

ママ さようなら

せつかくの機会だったのに、やはり、お父さんは、復縁することをしませんでした。

わたしに「しょうないですわ」と笑いながらいつてくれたのですが、複雑で微妙な夫婦心理というものを感じないではいられませんでした。

夫婦の絆というものと親子の情感というものは、別のものなのでしょうか。情感があるからといって、夫婦の絆が堅く結ばれているということではないようです。

わたしは、昔気質な人間ですから、浅井夫婦のような間柄は、理解できないのですが、優貴恵

ちゃんのような子どものほうが、むしろ、よく理解できるのではないのでしょうか。

いまでもにこにここと屈託のない笑顔をみせて、友だちと仲良く遊んでいる優貴恵ちゃんを見てみると、震災がチャンスだったのになあと思ったわたしの夫婦というものの概念が古臭くて、いまでは通用しない考えなんだということを明確にさせられたような気がします。

優貴恵ちゃんは、そんな両親を見ていますから、新しい夫婦像をつくりあげるナウイ女の子に成長すると思います。

(元市立神戸湊小学校教諭)